

## 【人物探訪】加藤文太郎 孤高の登山家

### 単独行の文太郎

小説家新田次郎は、加藤文太郎を「孤高の人」と評した。孤高とは、「一人だけ周囲から気高く抜きん出て高い境地にいる」という意味である。加藤文太郎とはそういう人物であったと新田は言うのである。わずか三十一年で生涯を閉じた加藤文太郎はどういう境地に達していたのであるのか。

\*

加藤文太郎は、一九〇五（明治三十八）年に浜坂町、今の新温泉町で生まれた。日本海を眺めて育った文太郎は、海の好きな少年だった。浜坂尋常高等小学校高等科を卒業した十五の春に、文太郎は三菱内燃機製作所に就職して、一人で神戸に出てきた。暮らし始めた神戸で、北側にある山に登っては海を眺めた。郷里を遠く離れて一人で生活を始めた十代半ばのまじめな少年文太郎にとって、寂しさから逃れるすべは他にはなかったのであろう。

海は情を慰めてくれる。

仕事を終えてから日暮れまでの短い時間に、海を眺望できる高台までの急峻を前屈みになって駆けるように登っていく彼の姿を想像すると哀しく切ない。

神戸の地形は山から一気に海に下っている。毎日のように海から高台に駆けるように歩く日々が、自ずと文太郎の足と腰とを鍛えることになったのではないだろうか。

文太郎は自ずと抜けて足が速かったそうだ。走るのがではない。歩くのである。これもきつと、海を見るためにひたすら駆けるように歩いたことが、彼の天分に拍車をかけたに違いない。またこの歩き方が寂しさを忘れ、寂しさに堪える道であることを、彼は学んだのかもしれない。

しかし、ここまでして眺める海は、このころの文太郎にとってはまだ見つめる景色であり、ただ眺める自然であった。挑む対象としての自然、格闘する自然、包まれる自然ではなかった。彼は次第に山に惹かれていった。

彼は海を愛する情の人であるばかりではなく、否、それ以上に意志の人、それも強靱な意志の人になっていく。

\*

彼が二十歳の時のことである。ある休みの日のこと、午前五時に和田岬の会社を察を出て、市内を歩いてまず須磨に行き、敦盛塚の所から須磨アルプス、高取山、再度山、摩耶山、六甲山、東六甲宝塚を縦走して、さらに西宮に出て街道を神戸に入り和田岬に帰るまで、合計百キロメートルを歩き通して帰ったという。

彼がいかに強靱な意志を持ち、また、ひとたび目標を立てれば、それを必ず実行せずにはいられない人であることを示している。

\*

当時の登山は裕福な人たちの趣味的な要素があった。登山靴も登山服も用具も高額だった。しかし文太郎は、地下足袋で山に登った。服装も、あり合わせのものを自分なりに細工した。それだけでも異色だったが、文太郎の登山の特徴は「単独行」だった。今もそうだが、登山はパーティーといって何人かのグループで山に挑むのが普通である。互いが協力して滑落の危険を少なくしたり、作業を分担して疲労を少なくすることができる。さらに孤独を感じることも少なくてすむからである。

しかし、文太郎はいつも一人で山に向かった。そこにはいくつもの理由があった。わずかな会社の休みにしか山に登れない彼の境遇が大きく影響している。また他の追隨を許さぬ速さで歩く彼としては、一人で登った方がより多くの山に挑める。彼にはいつの日かヒマラヤを征服したいという夢があった。そのためにはより多くの山で豊富な経験を積む必要があったことも否めない。彼の単独行は一見大胆不敵であるが、実際には細心で用意周到であったことが登山家の間ではよく知られている。

\*

一九三二（昭和六）年、文太郎二十六歳の一月のことである。文太郎はそれまでだれも考えたことのない富山県から長野県まで激寒の北アルプスの単独縦断を試みて成功した。列車で神戸に戻ってきた彼は新聞記者に囲まれた。しかし彼には意味がわからなかった。自分はただ冬山を一人で歩いただけで、それが偉大なことだなどと思ってもいなかった。彼にとってそんな記録など、どうでもよかった。名声などにとん着しない、そんな生き方の境地に達していたのである。世間は他人との比較で人を評価したが、彼はおそらく自分をそんな目で見たことはなかったであろう。ただ、「山は、山を本当に愛するものすべてに幸せを与えてくれるものだ」と信じて、厳しい自然と孤独を愛する自分自身を見つめていたに違いない。

その意味では新田次郎のいう「孤高の人」という相対的な評価すら、彼には関係がなかったと思う。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。  
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。